HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カフカの『失踪者』Der Verschollene：不在なる語り手の機能と読者の役割
Author(s)	西川, 智之
Citation	独語独文学科研究年報, 11, 123-134
Issue Date	1985-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25698
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_P123-134.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

カフカの『失踪者』Der Verschollene
— 不在なる語り手の機能と読者の役割 —

西川智之

1

コープスなどが指摘しているように、カフカの一貫した視点での（einsinnigな）[1]語りの特徴は、『失踪者』の冒頭ですでにはっきりと現われている。[2]ここで自由の女神の持っているのは、松明ではなく剣であり、この歪曲は、主人公カール・ロスマンの視点が語りの中心になっているために生じると考えられる。叙述の何を矛盾とみなし、歪と考えるかは、批評家自身の主観による点もあり、作品がカフカ自身の最終的な校正を経たわけでもないので、作品に生じる矛盾や歪がすべて、主人公カール・ロスマンの視点によって引き起こされると結論することはできない。[3]むしろ、矛盾や歪が解決されぬまま放っておかれ、それが、主人公に原因があるのか、作品の世界を操作する語り手、ないしは、作品の「食い違い矛盾する現実」[4]自体に起因するのか決定できないのがカフカの語りの特徴であり、作品の不思議な魅力にもなっている。第一章『火夫』を例に、カフカの一貫した視点での語りの特徴、および語り手の機能を見ていこう。

船室に傘を取りに戻ろうとしてカールは道に迷い、火夫の部屋のドアをノックする（8）。このカールと火夫の出会いの場面の前半部では、時おりカールの心の中の考えや印象に中断されはするものの、彼ら二人の会話が直接話法で再現される。火夫が仕事をやめることを知ったカールは、火夫に、船長のところへ行って自分の権利を主張するように勧めるが、火夫は、カールが「自分の話していることに耳を傾けもしないで助言を与える」（14）と腹を立てる。これを転機に、全く客観的とは言えないまでも、一応は二人の会話を描写していた視点が、カールの視点とほぼ重なる。

①„Einen bessern Rat kann ich ihm nicht geben,“ sagte sich Karl.

②Uud er fand überhaupt, daß er lieber seinen Koffer holen sollen, statt hier Ratschläge zu geben die ja nur für dumm gehalten wurden.

③Als ihm der Vater den Koffer für immer übergeben hatte, hatte er im Scherz gefragt：Wie lange wirst du ihn haben？und jetzt war dieser teuere Koffer vielleicht schon im Ernst verloren.[5]（14）

①ではカールの心の中の考えが直接話法で表現されている。②ではそれが間接話法となり、③では体験話法となる。つまり①→②→③の方向で語り手の介在が少なくなり、カールの視点がより強く前面に押し出される。読者は知らず知らずのうちにカールの考えの中に引き込まれる。③以後、

カールはトランクのことに考えを奪われ、楽隊の音でやっと我に帰る（17）。その間火夫が何をしているのかは全く言及されない。カールが火夫に関心を持っている間は、火夫の言動についても語られるが、火夫への関心が薄れるやいなや、読者は火夫について知ることができなくなる。

同じことは、船長たちの前での火夫の訴えの場面でも現われる（25ff.）。最初のうちは、「シューバルさんは不公平です。シューバルさんは外国人をえこひいきします。」（25）と火夫の言葉がそのまま伝えられるが、「火夫の多少まずい表現のしかた」（25）に気がつくと、火夫の言葉はもはや伝えられなくなり、他の人たちがどのように耳を傾けているかの方へカールの関心は移行する。そして更には、事件とは全く関係のない港の風景が描写されるが、この風景の「落ち着きのなさ」（27）は、客観的なものではなく、視点の中心カールの不安を逆に反映しているのである。[6)] 人々が火夫に苛立ち始めており、事態が猶予を許さないことを悟ったカールは、火夫に歩み寄って忠告し、「すべての希望が尽きてしまった合図に、ズボンの縫い目を手で」たたくが、火夫は「それを誤解して」カールと言い争いを始める（29）。しかし、火夫はカールのこのしぐさを誤解したのだろうか。カールがズボンの縫い目を手でたたいたことと火夫の怒りの間には論理的なつながりは見られず、それが結びつけられると、かえって読者はカールの理由づけに疑問を持ち、書かれたこととは別な理由を見つけるように刺激される。いずれにしろ、火夫がカールと言い争いを始めた理由を、全知の語り手が与えてくれることはない。逆説的に言うならば、カフカにおける語り手の機能とは、コメントを加えずに叙述の矛盾を放っておき、読者自身にその矛盾に気付かせることにある。読者はその矛盾を自分で解決せねばならず、また、その矛盾となった主人公カール・ロスマンの視点、更には、その視点に引きずり込まれていた読者自身の態度に、距離を取るようにせまられる。従って、カール・ロスマンの主観が比較的強く現われている箇所では、読者はそれに対する態度を決定しやすい。例えば「この男とは話しづらいな。」（9）という言葉からは、カールの火夫に対する用心・反発を読み取れるし、「こういった連中の心は、何かちょっとしたものをそっと与えれば、簡単に自分のものにできるからだ。」（15）という考え方からは、火夫を蔑視していることがわかり、読者はカールの視点に批判的に対処できる。むしろ問題なのは、比較的客観的な叙述である。客観的に思える箇所でも、読者は、語り手ないしはカールの操作を受ける。火夫はカールの姿を見た時、初対面のカールに「何の用か」とか「君は誰だ」と訊くのではなく、「なぜそんなに気の狂ったようにドアを叩くんだ」（下線筆者）と言う。読者は無意識のうちに、火夫は粗野で短気な性格であるとの判断に導かれる。それに続く火夫の部屋の描写を見てみよう。

「どこか天窓から、船の上の方ですでに使い古されてくすんだ光が、みすぼらしい船室に射していた。その船室で、ベッドと戸棚と椅子とその男が、貯蔵されているかのように並んでいた。」(8)

使い古された（abgebraucht）とか、くすんだ（trübe）、みすぼらしい（kläglich）

などの形容詞から浮かぶ陰湿なイメージは、火夫の部屋だけでなく、そこにいる火夫自身にも広がって行く。しかし、こうやって読者の頭の中で形成される貧相な火夫のイメージは、視点の中心であるカールの抱くイメージでもある。カールの主観的な態度があからさまに現われている箇所では、読者はカールの視点に気付くが、すでにそれ以前の箇所で、語り手は読者の抱く登場人物のイメージを操作し、カールの視点に読者を引きずり込んでいたのである。

筋の展開に関しても、語り手は信号を送っている。火夫の訴えの途中で、そこに居合わせた者の一人がカールの叔父であることがわかるのだが、この筋の急転は前もって準備されている。船長たちのいる事務室に入って行った時には、カールはそこに居る人たちを均等に描写する（20f., 22）。しかし、火夫弁護の口火を切るや、「竹製のステッキを持った紳士の赤ら顔」が障害となりだす(23)。火夫のまとまりのない話に最初にがまんできなくなり、ステッキで床をたたき出すのもこの紳士である（26）。火夫とカールの言い争いに腹をたてたそれぞれの人たちの反応とともに、この紳士の奇妙な振舞（叔父のヤーコプはこの時、女中が手紙に書いてよこしたカールの特徴と、目の前にいるカールとを比べていたのだが。Vgl. S. 46）も、何気なく挿入されている（30）。ステッキを持った紳士への再三の言及で、読者は、この紳士が物語の重要な登場人物の一人かもしれぬことを示唆される。そしていよいよこの紳士は、自分がカールの叔父であることを名乗るのだが、それも二段階の手順を経て行なわれる。それまで火夫の話に興味を示さなかった紳士は、突然カールに名前を尋ねるが、それはシューバルの登場によって中断される（31）。シューバルの登場で火夫の事件はクライマックスに近づき、読者の注意も再び火夫へ向けられるが、この紳士の質問も、物語の新たな展開の暗示として読者の意識に留まる。そしてこの中断の後、紳士が再びカールに名前を訊くと、彼らが叔父ー甥の関係であることが判明し、読者の期待は満たされる。このように、語り手と主人公の視点がほとんど重なっているために混然としてはいるが、カフカにおいても筋の展開への示唆がひそかに用意されている。[7)]

カフカの最初のロマーン『失踪者』と最後のロマーン『城』を比べれば、『失踪者』の方が会話の部分が少なく、[8)]また、体験話法の多用などで、主人公の視点がはっきりと感じ取れる。『城』においても、読者が知りうるのは主人公Kの見聞きしたことだけだが、会話の多用などから、背後に語り手の存在が予感され、物語が、主人公の主観的な印象なのか、語り手の客観的な叙述も含んでいるのか判断しづらくなり、一層「空所」[9)]が増える。それに対し、『失踪者』では主人公カール・ロスマンの主観が強く押し出されるため、カールの視点にのみ読者の注意が集中し、物語は、カールの目だけを通して描かれた世界へ還元されやすい。読者はカールの極端な視点に批判的な態度を取ればよいわけだが、それだけでは主人公の見方の否定にしかならない。カール・ロスマン個人の運命を超えたこの物語の世界、彼を取り囲む現実のしくみを知るために、次の章では、主人公と外界との関係、彼の運命を操る法則を明らかにしてみたい。

2

アイルランド人への偏見（9，133f.）に代表されるように、カールは先入観に囚われて独断的な判断を下す傾向がある。しかもその判断は、往々にして、直ちに全く正反対のものに変わる。第三章『ニューヨーク近郊の邸宅』で、グリーンは重要な役割を果たすが、グリーンに対するカールの意見は、状況に応じて様々に変化する。ポランダーの屋敷でカールとポランダーを待ち受けていたグリーンは、カールにとっての邪魔者である。夕食の雰囲気が台無しになったのも、カールが食欲をなくしたのも、すべてはグリーンのせいにされる。だが、グリーンの旺盛な食欲とカールのそれへの嫌悪感、グリーンの冗舌とカールの沈黙、二人の態度の対照性が際立てば際立つほど、グリーンよりもカールの態度の異常性に気がつく。クラーラに連れられて食堂を出て行く時に、カールの敵意は頂点に達する。グリーンのその時の態度には、「二人の間の必然的な社会的関係は、きっと次第に、両者のうちの一方の勝利か敗北かによって確立されるだろうという、グリーンのある種の確信が現われているように思えた。」（88）しかし、これもカール自身の敵意の反映であり、先入観によって生み出されたカールの妄想だろう。グリーンは、叔父ヤーコプの頼み通り、夜中の12時になるとカールに手紙を渡す。カールは、自分が叔父のところから追放されたことを知る。グリーンはトランクと傘を手渡しながら、サンフランシスコへ行き、「落ち着いて、ずっと下の方から」始めて、「努力してゆっくりと出世する」ように助言するが（124f.）、カールには「その時からグリーンは無害な人のように思われ、恐らく他の誰よりも率直に話せそうに」思える（125）。だが、この考え方もあまり説得力があるとは言い難い。カールの追放を当然のことのようにみなし、なぐさめの言葉ひとつかけるわけでもないグリーンは、残忍にすら思える。むしろ、叔父の手紙を読んで動揺したカールが、心細くなって、グリーンに頼ろうとしているのではないのか。しかし、このグリーンに対する信頼も、「グリーンが即座に、大股で歩くのを」、「怪しげなあたふたとした様子」を見て、再び覆される。グリーンの活動的な性格は食事の場面からも窺い知ることができ、その彼が急いで「大股で」歩いても何の不思議もないのだが、このグリーンの動作から、カールは「真情を認識」する（125）。カールが「最終期限」の12時までに叔父の家へ帰れなかったのは、その時間までカールを引き止めたグリーンに「責任がある。」（126）それまでに叔父のところへ帰っていたら、叔父はカールを受け入れ、許してくれたかもしれぬとカールは考える。しかし、手紙にもあるように、叔父は自分の「主義」に従って決心し、カールにも、叔父のもとを去るという彼自身の決心を貫くように求めている（122f.）のだから、カールが12時までに戻っていたとしても、叔父の決心は変わらなかっただろう。このように、グリーンはポランダー家での食事をひどい思い出にした張本人になったり、叔父の家から追放されたカールが、他の誰よりも率直に話せそうに思える無害な人になったり、叔父の家に戻れなくなった責任を負うべき人物になる。だが、どの人物像

もその時々のカールの心の状態に左右されており、客観性を欠いている。もちろん読者にはカールの視点しか与えられておらず、その視点に同調しながら物語を読むように仕向けられるので、グリーンに好感は持てないものの、状況によって揺れ動くカールの意見に対しても疑問が生じてくる。カールとは違った見方を模索するようになるが、どの見方が正しいと決める手だてはないので、読者は常に不確定性にさらされる。

観察もカール・ロスマンの視点の特徴の一つだが、その場合にも、状況を観察しているはずのカールが、逆に回りの状況の虜になってしまう。もちろんこの観察という機能は、カールと回りの事物・状況とを対照的に描写する全知の語り手が存在しないために、カール自身に担わされるのだが、自分の置かれている状況から一歩退いて回りの事物を観察しているうちに、カールは自分の置かれている状況に適切に対処する時期を逸してしまう。オクシデンタル・ホテルを首になったカールは、正面玄関で門衛主任につかまるが、この危機的状況にあって、カールは逃げ出すことも忘れて、玄関や門衛室の様子をつぶさに観察する。[10] 確かに最初のうちは、助けが求められないかと回りの様子を窺うのだが、すぐにその観察は、こうした状態ではふさわしくないほど細かい点にまで及んで行く。「門衛主任が手ごわい敵であることさえ忘れて」(259)門衛室の仕事に見入っていたカールは、門衛主任の言葉で自分のいる状況をやっと思い出し、「門衛室に関する好奇心は、すっかり」静まる(260)。だが、こう断言したにもかかわらず、カールは、すぐにまた門衛助手の仕事に注意を奪われる。カールは、「門衛主任が、座って、しがみつくようにして、彼を体の前で押さえているにもかかわらず、これらすべてを精確に目で追わずには」いられない(261)。ポケットの中身を調べられ、やっと逃げ出す時には、カールは上着も身分証明書もコック長の名刺も、すべて門衛室に置き去りにしなければならない。門衛主任から逃げ出す機会を窺い、助けを求めてまわりに目をやっていたはずのカールが、逆に回りの事物の虜となり、逃げ出す機会を失っていく。

カールの判断は状況によって揺れ動き、そして状況に振り回されているうちに、カールは自分の陥っている状況から脱出する機会を失う。このようなカールの行動の底にあるのは、彼の受動性と利己主義である。そもそもカールは「哀れな両親に、アメリカへやられた」のであり、しかもその原因は「ある女中が誘惑し、彼の子をもうけてしまったため」である(7)。[11] 故郷から「両親によって押し退けられた」(38)カールは、火夫の事件がきっかけで叔父ヤーコプに引き取られるが、結局、叔父はカールを再び「放り出す」(123)。ラムゼスの町への移動、オクシデンタル・ホテルでの就職と解雇、警官からの逃走とブルネルダの部屋への幽閉。運命の変わり目において、常にカールは受け身である。カールの運命は常に他の人たちによって決められ、しかもそれはグリーンやコック長の願ったような(124f., 171)発展的なものではなく、より下方への転落である。[12]

「『失踪者』というロマーン全体は、実際、根本的には『正義』という問題との唯一の対決であり、その『正義』を主人公カール・ロスマンは徒らに求めてやまない」[13] というエムリッヒの見解、

或いは、カールは「もはやそそのかされたり、誘惑されたりしない。彼は自らイニシャチブをとり、全責任を負う」[14]というポリツァーの主張は、カールの受動性、利己主義を否定する。事実、第一章『火夫』において、カールは正義のために積極的に戦っているかのように見えるが、果たしてその通りだろうか。確かに、船長のところへ行って自分の「権利(Recht)」(14)を主張するように促したのはカールだが、前述したように、その後カールは自分のトランクのことに考えを奪われる。火夫が「カールの手をとり」船長のところへ行くと言った時にやっと、カールの火夫への関心が再び喚起されるのであって(17)、カールはやはり受動的である。また、カールは船長たちの前で火夫を弁護し、正義を楯に反論するが(46)、落胆してワイシャツのすそが見えているのにも気づかない火夫の姿から、火夫が解雇された後の船の様子を思い描き(47)、事態が絶望的なことを知りながら船を去るカールは、最後まで正義を貫いてはいないし、「イニシャチブをとり、全責任を負」っているとも言えない。火夫に連れられて船長たちのいる事務室にやって来たカールは、叔父に連れられて船を去る。イニシャチブは常に他の者が握っている。

カールの正義感にも疑問が生じる。カールは、シューバルがドイツ人を差別するという火夫の不満は信じたのに(13)、シューバルの言葉には様々な疑問を抱く(34)。カールは「確かに、すべてを吟味し、気をつけて見るべきだが、そのとりこにされてはならない」という叔父ヤーコプの助言(56)は、この場合にも当てはまる。彼は双方の主張を吟味すべきで、一方に囚われては公正な判断は下せないし、その正義は一人よがりなものになる。「火夫のこの性急さは……」(23)、「火夫の多少まずい表現のしかたで……」(25)、「すべては急ぐように、明らかにするように、すっかり正確に描写するように促していたが……」(27)など、この場面でカールが一段高い立場からなりゆきを見守っているかのようにふるまう箇所は、枚挙にいとまがない。カールが視点の中心なので、状況を客観的に把握しているかのように振舞うカールの優越性が目立つのは当然だが、読者には、この一人よがりな優越性が際立てば際立つほど、また、カールの期待と実際の事件の展開の乖離が大きくなればなるほど、カールの視点が疑わしくなる。彼の独善性は次の箇所で極まる。

「カールはしかし、恐らく故郷では一度もなかったほど、自分が力強く、しっかりしているのを感じた。彼が異郷で、立派な人たちを前にして善のために戦い、たとえまだ勝利にもって行くことはできないにしても、最終的な勝利の準備は完全にできている様子を、両親が見ることができたらなあ。彼らは、彼についての意見を修正するだろうか。自分たちの間に彼をすわらせて、ほめてくれるだろうか。彼らに忠実な彼の目を、いつかは、いつかは見てくれるだろうか。」(33)

カール自身が言うように、「最も不適当な瞬間」に、このような「不確かな質問」(33)に接した読者は、それまでのカールの火夫への弁護そのものに疑問を持たされる。両親にほめてもらおうと思って、カールは火夫を弁護し、「善のために」戦っていたのか。火夫のためのカールの正義感・利他主義は、このような子供っぽい自己満足・利己主義と裏表になっていたことがわかる。

3

叔父のところから追放されたカールは、自分で生活の糧を稼ぎ出さねばならなくなる。その出発点となるのがオクシデンタル・ホテルである。コック長の紹介で、カールはエレベーターボーイとして働き始めるのだが、その時の二人の会話を見てみよう。

カールは、ドラマルシュとロビンソンとはけんか別れしたことを告げる。

「『それじゃ、あなたは自由なのね』と彼女は尋ねた。『ええ、自由です』とカールは言ったが、彼にはそれ以上価値のないものはないように思われた。『ねえ、このホテルで働いてみたくはない。』とコック長は尋ねた。『そりゃあ、喜んで』とカールは言った。」（171）

「自由な（frei）」という言葉は、普通、価値の軸で言えばプラスの意味を持つ。それが、カールには「価値のないもの」に思われる。彼がどういう意味でこの言葉を使い、また、なぜ唐突に、自由ほど「価値のないものはない」と考えたのかは述べられていない。それだけに一層、この謎は読者の注意を喚起する。続いて話題となるのはカールの働き口のことである。話題が「自由」から「職業」へ移行するにつれて、この二つは読者の頭の中で結びつく。「自由な（frei）」という言葉は、「仕事がない」、「仕事が休み」の意味でも使われるので、この結合は容易に行なわれる。ホテルで働き始めることは、カールが「自由」でなくなることである。だが、カールには「自由」でなくなることに何の抵抗もない。「彼にはそれ以上価値のないものはないように」思えるのだから。このテーマは、カールが制服を直してもらう場面で再び出てくる。「ぴったりとしたズボン」と「まだ息ができるかどうか確かめて見ようと、何度も深呼吸をしたくなるような窮屈な上着」（185）。この制服のイメージは、エレベーターボーイの仕事全体へ広がる。エレベーターボーイの仕事が、カールを「窮屈」に締め付け、「自由」を奪うことが暗示されているのである。

コック長の言葉は、エレベーターボーイとしてカールが雇われた後の物語の展開も示唆している。

「さしあたっては、ほんのちょっとした職場につくことになるでしょうけど、勤勉に、注意深くやって、昇進するようにしないとだめよ。」（171）

この言葉は、叔父の手紙を手渡した時に、グリーンが「静かに、ずっと下の方から始めて、努力して、ゆっくりと出世するようにやってみなさい」と助言したのと呼応する。グリーンの助言が、カールが叔父のもとから追放された時に、つまり、座標で言えば、カールの身分がマイナスの方向へ動いた時になされた様に、コック長の言葉は、カールの新しい境遇が始まる時に、今後の物語の筋の指標として現われている。カールの身分がさらにマイナスの方向へ動くのか、プラスの方向へ逆転するのかが、物語の筋として示唆されている。出世することは、カール自身の目的にもなる。カールは、他の人たちにつけられた「差」を、「より勤勉に働き、少しばかりのことを断念することで」埋め合わせようとし（193）、他のエレベーターボーイたちが「自分たちの現在の境遇に妥協

して……将来の自分たちの職業を決める必要性を理解していない」のに驚く（203）。自分たちの生に対して無気力な他のエレベーターボーイたちが、ホテルの巨大な機構に、思いのままに組み込まれている様に、出世するために仕事に精を出すカールもまた、この機構に操られている。[15]

「だが、もしカールが、いつか事務所でこのような職につけたら、その仕事以外は行なわず、この学生のように力を分散しないようにしよう。……彼は、自分の勤める事務所の利害だけを考え、他の事務員が、自分にはふさわしくないと拒否するような仕事であっても、すべての仕事を引き受けよう。」（353）

ブルネルダの部屋のベランダで隣の学生メンデルと話した後で、カールはこのように考えるが、カールの労働世界に束縛された狭い視野は、ここに集約されている。彼は自分の仕事、事務所の利益のことしか考えず、それが社会でどんな機能を果たすかは問題にしない。ここでもカールは状況の虜となり、「すべてを吟味し、気をつけて見る」（56）ための大局的な視点を欠いている。

オクシデンタル・ホテルでの物語の転機がいつ現われるかは、カフカでは珍しいことだが、「カールがラムゼスにいた１ヶ月半の間」（195）という言葉で、はっきりと提示されている。つまり、少なくとも１ヶ月半後には、カールがオクシデンタル・ホテルにはいなくなることが読者に知らされる。そして、「カールがラムゼスに来てから１ヶ月ぐらい」して、同僚のレネルが、ドラマルシュにカールのことを尋ねられたことで（204f.）、この筋の転機にはドラマルシュが関係するかもしれないと予想がつく。実際には、ドラマルシュと対をなすもう一人の登場人物ロビンソンが原因で、カールはホテルを解雇されるのだが、その解雇の理由も、あらかじめ示唆されている。カールは酔っ払ったロビンソンの姿を見て、もしロビンソンのことがばれたら、自分は首になるかもしれないと考えるが（213f.）、「カールの熟考は、細かな点にいたるまで、後にボーイ長と門衛主任の行なう非難・告発と一致する。これもまた、読者に、来るべきものに心構えをさせるひとつの手段である。」[16]

カールの自己弁護の破綻も、ボーイ長の最初の言葉ですでに暗示されている。

「君は、許可なしに持ち場を離れた。それがどういうことかわかってるかね。首ということさ。私は、言い訳を聞こうとは思わない。でっちあげた口実は、胸の中にしまっておくんだな。私には、君がそこにいなかったという事実だけで十分だ。」（224）

首という決定は、最初に下されてしまっている。カールの自己弁護の言葉は、すべて「でっちあげ」と取られ、カールが服務規定に違反したという「事実」だけが重視される。自己弁護の途中で、カールは「自分の言えるすべてのことが、あとで、思ったのとは全く違った風に見え、善を見出すか悪を見出すかは、判断のしかただけに任されていること」がわかり、黙り込んでしまう（245）。しかし、自己弁護には言葉が必要だが、その言葉は聞き入れられないというこの袋小路は、ボーイ長の最初の言葉ではっきりと提示され、コミュニケーションの可能性は、最初から否定されていたのである。コミュニケーション不能の状態は、カールとコック長やテレーゼとの関係も支配する。

カールが黙っていては、コック長は彼を助けられないし、一方カールの方では、コック長が「正義」を楯に反論してくれるものと期待する(247)。しかしコック長の言葉は期待に反する。

「正しい物事は、確かに特別な外見をしているわ。そして、はっきり言ってしまえば、あなたの件にはそれがないのよ。」(247)

カールは、伝えることのできない「正義」にこだわり続け、コック長は、カールの言葉や素振などの「外見」と、報告される事件の概要からしか事件を判断できない。カールとコック長やテレーゼとを結びつけているのは、利害や論理を超えた無条件な愛であるが[17]、彼らの間ですら真実を伝えることはできない。それだからこそ、彼らにとっては、「カールが何か罪を犯したかどうか、彼のことが正しく判断されたかどうかはどうでも良く、カールがのがれられれば、恥をかこうが、名誉を保とうがどうでも良い」のである(251)。

カール自身の言うように、「今では、このエレベーターボーイの仕事は、彼が望んだように、もっと良い地位への前段階ではなく、むしろ、今や彼はもっと下の方へ押し下げられたのだった。」(264)物語の筋は、座標軸のさらにマイナスの方向へ、つまりカールの転落の方向へ向かうことになる。ホテルを首になったカールは、ドラマルシュとロビンソンによって、ブルネルダの召使にされる。あれほど彼らを軽蔑していたのに、カールは、結局、彼らと同じようにアウトサイダーに転落してしまう。その後カールがどんな生活をするのかは、作品が未完であるためにはっきりしないが、カールの転落はさらに続くらしい。カールが最後に勤めていた「事務所」は、「より詳しい情報を求め」られたら、「嘘をつかねばならない」ようなところだし(406)、断片『ブルネルダの出発』に現われているように、その頃には、カールは「警官との十分な経験」を持ち、「警官の軽蔑は、注目よりもましだった」(381)と考えるほど世間ずれしているのだから。

「オクラハマ劇場」[18]は、転落の末にカールが最後にたどり着く場所である[19]。今まで常に他の人たちに運命を決められてきたカールが、今回は、ポスターを見て能動的に、自らこの劇場に応募する。この劇場は「ほとんど際限のない」大きさの「世界最大の劇場」(394)であり、「200もの様々な事務局」(395)を持つ点では、あの巨大なオクシデンタル・ホテルと共通する。いくつかの事務局を引き回された末、カールが最後に連れていかれるのは、ヨーロッパの中学生のための事務局である。それは、「一番はしに」あり、「他の事務局より小さいだけでなく、低くさえあり」、「最後の逃げ場」のように見える(401)。カールの身分の降下は、ここでも継続している。採用されたカールの腕には、直ちに「技術労働者」という腕章が巻かれる(409)。オクシデンタル・ホテルの制服と同様に、この腕章によってカールは巨大な機構の歯車に組み入れられる。上層部と下層部の間で、直接的な意志の疎通ができない点も、現代の複雑な官僚機構と共通している。歓迎の晩餐会で、新しく採用された者たちは、競馬場の審判席にいる二人の男にグラスを向けて乾杯するが、「審判席では、この熱狂的な歓迎に気がついたとか、少なくとも、気をつけようという風には全く見えな

かった。」(411)このように「オクラハマ劇場」は、現代社会の非人間的特徴を備えており、その点は、カールが今まで遍歴してきた世界と変わりはない。

一方、ここに集まって来るのは、「財産もない、うさんくさい連中」(416)ばかりである。「自分の未来を考える者は、われわれの仲間である」(387)という募集ポスターの文句通り、彼らには守るべき財産がないので、過去に束縛されることがない。彼らは未来に希望をかける他はない。両親からも、おじからも、オクシデンタル・ホテルからも追い出され、唯一の財産のトランクも、身分証明書もなくしたカールは、その中でも最もうさんくさい一人である。だが事務局の秘書は、さっさとカールを採用してしまう。カールは名前を「ネグロ」と詐称する(402)。事務局長は、それが偽名なのを見抜くが、秘書の方は偽名と知りながらも、カールの採用を告げる(403)。この劇場のいいかげんな点はまだある。「ほぼあらゆる微妙な音を吹くことができる楽器」(393)なのに、「トランペットは勝手に」吹かれる(389)。この劇場では、複雑な機構を持つにもかかわらず、個人の恣意が認められているのだろうか。ともかくもカールは、彼の希望の「エンジニア」に近い形で「技術労働者」として採用され、昔の知り合いのファニーとジャコモにも再会する。

このように、「オクラハマ劇場」は、現代社会の複雑な官僚機構を反映しながらも、一方ではルーズな面があり、また、カールはここで職業と友人を見出す。人間を管理・統制する非人間的組織なのか、人間の自由を認める共同体なのか、どちらの側面がこの劇場の本質なのか、読者には手がかりが与えられない。それどころか、カフカ自身がこの小説について相反する言葉を残している。ブロートによれば、カール・ロスマンは「この『ほとんど際限のない』劇場で、職業、自由、後楯を、いやそれどころか、故郷と両親とを、まるで楽園の魔法によるかのように、再び見つけ出す」ことになっていた。[20] 他方、カフカは、「ロスマンとK、罪なき者と罪ある者、結局は二人とも区別なく、罰として殺される。罪なき者はより手軽に、打ち倒されるというよりは、わきへ押しのけられる。」[21]と、日記に記している。ひとつの解釈を試みてみよう。[22] ここにたどり着くまでにカール・ロスマンは、財産も、身分証明書も、名前さえもなくし、社会のどん底にまで転落する。彼は、社会的にほうむり去られ、「わきへ押しのけ」られた。だが、社会からの排除は、逆に社会からの解放であり、カールは自由を手に入れたことになる。「オクラハマ劇場」で、カールは希望通りの職業につき、友人にも再会した。更に彼は、後楯や故郷や両親を見出すことになっていたに違いない。しかし、このロマーンは未完成であり、「オクラハマ劇場」も非人間的側面を持つので、果たしてここが「楽園の魔法」たりうるかは疑問である。また、たとえカールが故郷や両親を再び見つけ出すにしても、それにどれほどの価値があるだろう。人間は社会の中で生きるべく運命づけられており、社会で自己実現できなかったカールが、社会から排除されて初めて自己実現を果たすのなら、それは、生きることと自己実現とが相容れないことを意味するのではないのか。

こうして『失踪者』は、読者に多くの疑問を持たせたまま中断する。このロマーンから何を読み

取るかは、最終的には読者自身に任せられる。そしてその解釈は、作品の意味というよりは、読者の読書行為そのもの、そして読者自身の世界観を反映する。現代文学のテクストでは、「代表的な意味がすべて削除されていても、テクストは受容過程によって読者を省察へと刺激し、読者の抱く諸表象へのある関係にたどり着くチャンスを与える」[23]からである。

使 用 テ キ ス ト

Franz Kafka：Schriften, Tagebücher, Briefe. Kritische Ausgabe. Der Verschollene, hrsg. von Jost Schillemeit, S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1983. なお本文中の（　）の数字はテキストのページ数を、注のApp. はApparatbandのページ数を表わす。

注

1) Vgl. Friedrich Beißner：Der Erzähler Franz Kafka und andere Vorträge. Mit einer Einführung von Werner Keller, Frankfurt a. M. 1983, S. 62. なおEinsinnigkeitの訳語「視点の一貫性」は、加藤忠男氏の訳に倣った。Vgl. 城山良彦・川村二郎編『カフカ論集』（国文社　1975）248頁。

2) Vgl. Jörgen Kobs：Kafka. Untersuchungen zu Bewußtsein und Sprache seiner Gestalten, hrsg. von Ursula Blech, Bad Homburg v. d. H. 1970, S. 34ff. und Heinz Politzer：Franz Kafka. Der Künstler, Frankfurt a. M. 1978, S. 199ff.

3) Vgl. Hartmut Binder：Kafka Kommentar zu den Romanen, Rezensionen, Aphorismen und zum Brief an den Vater, 2. bibliograph. erg. Aufl., München 1982, S. 121f.

4) Horst Steinmetz：Suspensive Interpretation. Am Beispiel Franz Kafkas, Göttingen 1977, S. 93.

5) ②以下の部分は、最初、内的独白の形で書かれ、主人公カールの視点が、より直接的に現われていた。Vgl. App. S. 126.

6) Vgl. Binder：a. a. O., S. 94 und Kobs：a. a. O., S. 153.

7) Vgl. Binder：a. a. O., S. 108, S. 130 und Politzer：a. a. O., S. 220.

8) Vgl. Dietrich Krusche：Kafka und Kafka-Deutung. Die problematisierte Interaktion, München 1974, S. 51.

9) Vgl. Wolfgang Iser : Der Akt des Lesens, München 1976, bes. S. 226 und derselbe : Die Appellstruktur der Texte, 4. Aufl., Konstanz 1974, bes. S. 15.

10) この部分はコープスが詳細に分析している。Vgl. Kobs : a. a. O., S. 163ff.

11) 女性に対しても、カールは常に受け身である。女コック長やテレーゼとの出会いにしても、最初に声をかけてきたのは彼女たちの方であり（156 u. 178）、クラーラと争った際にも、カールはクラーラに組み伏せられ、「もはや身動きできなく」なる（94）。

12) Vgl. Binder : a. a. O., S. 88, S. 149f. und Politzer : a. a. O., S. 217.

13) Wilhelm Emrich : Franz Kafka, 9. Aufl., Königstein／Ts. 1981, S. 231.

14) Politzer : a. a. O., S. 213.

15) 「おじのもとでカールは、まだ、特権を持つ者の観点で体制を讃嘆し、その体制に関与することが許された。今や彼は『歯車』に組み込まれる。中心となるのは、黙従、適応し、コネや有利さをうまく、十分に利用しながら、服従と業績によって昇進しようという考えである。」 Vgl. Peter U. Beicken : Franz Kafka. Eine kritische Einführung in die Forschung, Frankfurt a. M. 1974, S. 259.

16) Binder : a. a. O., S. 130.

17) Vgl. S. 182f.「あなたを初めて見た途端、私はあなたを信用したの。」／S. 248.「それでもなお私は、あなたが根本的にはちゃんとした若者だと思わないではいられないの。」

18) カフカの草稿では、（従ってKritische Ausgabeでも）、終始„T(h)eater von (od. in) Oklahama“となっているので、それにならう。

19) 「私は、交わした会話から、『オクラホマの野外劇場』の現在の姿の未完の章は、……最終章であり、宥和的な音で終わるようになっていたのを知っている」と、ブロートは『アメリカ』の後書きで述べている。Vgl. Franz Kafka : Gesammelte Werke in Einzelbänden. Amerika. Roman, hrsg. von Max Brod, 3. Aufl. 12. Tausend, o. O. 1980, S. 260.

20) Ebd., S. 260.

21) Franz Kafka : Tagebücher 1910－1923, hrsg. von Max Brod, o. O. 1967, S. 344.

22) Vgl. Beicken : a. a. O., S. 259f.

23) Wolfgang Iser : Die Appellstruktur der Texte, S. 30.

（大学院博士課程）